

# 健常者の障害者スポーツ体験に関する研究視角の検討

——障害に対するポジティブな応答はなぜ生まれるのか——

奥 田 睦 子

## 要 旨

本研究では、健常者の障害者スポーツ体験において、ポジティブな応答の報告がみられること  
の理由について、健常者の身体に着目して検討した。その結果、3つの仮説が導き出された。す  
なわち、健常者の障害者スポーツ体験では、健常者と障害者の身体機能の逆転が起きたこと  
によって障害への「できない」という否定的な要素が、消し去られること、健常者にとっての障  
害者スポーツ体験が「できない」を楽しむスポーツの非日常としての遊びの体験となり、そのこ  
とによって楽しさが生まれていること、障害者スポーツ体験によって健常者の身体に他者性を内  
包する「開かれた身体」の獲得がなされた場合に、自—他の境界の融解の可能性があること、で  
ある。

今後の健常者の障害者スポーツ体験に関する研究については、疑似体験の難しい知的障害者  
や精神障害者も含めて検討することもできるように、なぜ障害に対するポジティブな応答が得  
られているのかについて、特に身体の見方から考察していくことが必要なのではないか。

キーワード：健常者、障害者スポーツ体験、身体、遊び、障害

## 1. はじめに

### 1.1 本稿における障害者スポーツ体験の用語の範囲

健常者がスポーツ活動を行う場合、その形式は大きくは2つの方法に分類できる。1つは、障  
害の程度が競技に与える影響が小さい場合に、身体条件や発達状況にルールや用具などを合わ  
せずに、一般的なルールや用具の範囲内で行う方法である。すなわち、健常者が行っているス  
ポーツ活動と全く同様に行う方法である。もう1つは、障害の程度が競技に与える影響が大き  
い場合に、一般的なルールや用具を障害の程度に合わせて変更したり、あるいは、新しく考案  
したスポーツを共に行ったりする方法である。(公財)日本障がい者スポーツ協会が認定する障  
害者スポーツ指導者の養成講習会等で使用するテキストには、「障がい者にとっての身近なス  
ポーツ」という項目があり(日本障がい者スポーツ協会, 2018)、そこには、障害に応じたス  
ポーツづくりのための工夫の方法や視点、障害のある人とない人とが一緒に楽しむことができ  
るスポーツの事例等が紹介されている。重度の脳性麻痺者で、ボールを投げる動作ができない  
人でも、勾配具を使用し介護者とペアで参加するボッチャや、下肢障害者が座位姿勢のまま行  
うチェアスキー、視覚障害者が聴覚や触覚によってボールの位置や台の位置が分かるように工

夫がなされたサウンドテーブルテニス、ボールや相手選手の位置を知らせるコーラーと言われる晴眼者が、視覚障害者と共に必ず試合に参加するゴールボールなどが紹介されている。

また、障害者スポーツを表現する言葉として、アダプテッド・スポーツがある。アダプテッド・スポーツとは、「本来一人ひとりの発達状況や身体条件に適合させたスポーツという意味であり、具体的にはスポーツのルールや用具を障害の種類や程度に合わせて行うスポーツ活動」(斉藤, 2015)と説明されている。

これらのことを踏まえ、本稿では健常者による障害者スポーツ体験の用語の範囲を、「ルールや用具を、障害の種類や程度に合わせたスポーツ活動の体験」または、「ルールや用具を障害の種類や程度に合わせたスポーツ活動を、障害者と共に行う体験」とする。

## 1.2 障害体験の危うさ

障害者スポーツを知る機会あるいは障害者への理解を深める機会として、学校や地域では障害者と共に障害者スポーツを行う機会がもたれたり、健常者向けの障害者スポーツ体験会が行われたりしている。その成果として、障害へのポジティブな応答が見られることが複数報告されている(安井, 2004; 古岡, 内田; 2007, 国永, 曾根ほか; 2014, 加地, 河野; 2016)。一方、障害者の疑似体験に関する研究では、障害者が感じている困りごと、むずかしいこと、できないことに目が行き過ぎてしまうことによって、障害者へのネガティブな態度を植えつけることになること(久野, 2001; 西館, 水野ほか; 2016)、当事者意識と疑似障害体験の経験者の中で構築されたリアリティにズレがある可能性があること(高橋, 鈴木; 2016)、体験は人々の間のコミュニケーションを通じて協働的に構成されると考える社会構成主義の観点から捉えることが必要であり、障害の疑似体験は、障害当事者と協働してある事柄を障害(ディスアビリティ)として意味付ける過程に参加することによって可能になる(松原, 佐藤; 2011)という報告もある。障害者スポーツ体験もスポーツ領域における障害者の疑似体験の一つであることを考慮すると、健常者の障害者スポーツ体験においても、必ずしもポジティブな応答ばかりにはならない可能性が含まれると考えられる。したがって、健常者の障害者スポーツ体験において、なぜ障害へのポジティブな応答が見られるのか、その理由について考察することが必要であろう。先行研究において、このような研究視角によるものはほとんど見られない。

## 1.3 研究の目的

そこで、本研究では健常者の障害者スポーツ体験において、障害へのポジティブな応答の報告がみられることの理由について考察することを目的とする。また、この過程を通じて、今後の健常者の障害者スポーツ体験を研究する際の研究視角についても考察することを目的とする。

#### 1.4 研究の枠組み

障害と言っても、大きくは身体障害、知的障害、精神障害（発達障害を含む）の3つの種別  
に分類され、また、身体障害と知的障害、身体障害と精神障害、知的障害と精神障害等  
のように障害が重複する場合もある。障害者スポーツや障害への理解を深めるための機会  
として実施される障害者スポーツ体験は、車いすに乗って行う車いすバスケットボールや  
アイマスクの着用によって行う視覚障害者のスポーツ体験など、身体障害単独のスポーツ  
であることが多い。この理由として、知的障害者や精神障害者がスポーツを行う場合、  
障害の程度が軽度であれば、運動能力への影響が小さいことから、身体条件や発達  
状況にルールや用具などを合わせることをせず、一般的なルールや用具の範囲内  
で健常者と同様のスポーツを行っていることが考えられる。全国障害者スポーツ大会  
における知的障害者のサッカー、精神障害者のソフトバレーボールなどはその例である。  
また、知的障害や精神障害は、その障害特性から環境の変化への適応が難しい人も  
いるため、継続性を意図しない体験会等において見知らぬ人と一緒に活動を行うこと  
が難しい場合もある。このような状況から、健常者の障害者スポーツや障害への理解  
を深めるための機会として実施される障害者スポーツ体験は、身体障害者のスポーツ  
体験であることが多い。

そこで、本研究では健常者の障害者スポーツ体験によって障害へのポジティブな  
応答の報告がみられること、理由を考察するにあたって、健常者の障害者スポーツ  
体験として身体障害者のスポーツ体験を中心に考察する。

## 2. 障害者スポーツ体験における身体感覚

M. マクルーハンとは、テクノロジーやメディアは身体の特定の部分を「拡張」する  
ものであると述べている（M. マクルーハン；1987）。この考え方を身体障害者の  
スポーツに当てはめると、例えば、脊髄損傷者や下肢切断者が行う車いす  
バスケットボールや下肢切断者が義足を用いて行う陸上は、身体障害者  
にとっては車いすや義足がテクノロジーやメディアとなり、走ることが  
できない自分自身の足の身体機能を拡張させて行うスポーツと言えよう。  
一方、視覚障害者が行う音の出るボールを使用したサウンドテーブル  
テニスでは、健常者の卓球が視覚を頼りにボールの位置を確認するの  
に対して、自己に元来備わっている聴覚を頼りに行うものであり、  
ここにはテクノロジーやメディアを介した視覚に関する身体機能の  
拡張は伴わない。このように、身体障害者のスポーツには、車いす  
や義足のような用具によって身体機能を拡張させて行うものと、  
用具による身体機能の拡張は無く、自己に備わる別の身体感覚を  
活用させるものとの2つがあると言える。

では、健常者の車いすバスケットボール体験や義足を装着した状態で  
走る陸上体験、アイマスクを着用したサウンドテーブルテニス体験は、  
M. マクルーハンの考え方をを用いると、どのよ

うに考えることができるのだろうか。筆者が大学生を対象に行った車いすバスケットボール体験会<sup>注1)</sup>においては、シュートする際にゴールまでボールが届かない学生や、車いすに乗った状態で床にあるボールを上手く拾うことができない学生が多くみられた。また、なぜゴールまでボールが届かないのか、なぜボールを上手く拾うことができないのかと問うと、学生からは「シュートのときに下半身が使えず、手だけで投げなければならないから届かない」、「しゃがめないからボールを拾いにくい」といったことが聞かれた。

また、健常者が義足のランナーを「疑似体感」できる体験用義足を装着すると、最初はバランスを取りながらゆっくり歩くことさえ難しいと言われている(写真1)。陸上競技の義足にはカーボン素材の板が使用されていることからバネの特性がある。そのため、その反発力を受け止め使いこなすには強い筋力と高度な技術が必要であると言われており(朝日デジタル, 2016年5月3日版)、健常者にとっては自らに備わっている足を義足に置き換えることによって、通常の足の機能で可能であったバランス能力を奪われた状態が生じている。健常者のアイマスクを着用したサウンドテーブルテニス体験では、目の機能を通して可能であった情報収集の機能が、アイマスクによって視界を遮断されることで情報収集ができない状態が生じている。



写真1 朝日新聞デジタル、「陸上競技の義足、ランナーに強い筋力と高度な技術必要」、2016年5月3日版より転写。



写真2 富山県障がい者スポーツ協議会、「平成29年度 障がい者スポーツ指導員中級受講報告」より転写。

健常者の車いすバスケットボール体験や義足を装着した状態で走る陸上体験、アイマスクを着用したサウンドテーブルテニス体験は、車いすや義足、アイマスクのいうテクノロジーやメディアによって、健常者にとっては元来備わっていた身体機能に制限がかけられる状態が作りだされることであり、すなわち、自己に備わっていた身体機能を縮小させて行うものとなることができる。

ところで、健常者のスポーツにおいても、テクノロジーやメディアによって身体機能を拡張

させることは行われている。水の抵抗を小さくしたり、浮力を獲得させたりする水着として現在は着用禁止となっているが高速水着（レーザーレーザーやラバー水着）や、モータースポーツにおいてより高速走行することを可能にするスリックタイヤ（排水用の溝の無いタイヤ）などである。また、スポーツのルールや用具を障害の種類や程度に合わせて行う、アダプテッド・スポーツの考え方に即したスポーツもある。平均的には青年期よりも運動能力が低下している中高年者が参加しやすいように、一般的な卓球のボールの直径を一割大きくし（一般の卓球のボールの直径は40mmであるが、一割大きくしたボールの直径は44mmである）、ボールの空気抵抗を大きくして跳ね上がりにくくしたり、回転がかけにくくなるラケットを使用したりするラージボール卓球、子どもの体力に合わせて、通常よりも小さいサイズのバスケットボールや高さの低いゴール、短い試合時間で行うミニバスケットボールなどがそれに該当する（表1）。

このように、健常者の行っているスポーツは、テクノロジーやメディアによって身体機能を拡大させることや身体状況に合わせて用具やルールを合わせることもあっても、身体機能を縮小させることはない。したがって、身体機能を縮小させる障害者スポーツ体験は、特殊なスポーツ体験であると言えよう。

表1 身体機能と用具・ルールとの関係性

	身体機能を拡大させるテクノロジー	身体機能を縮小させるテクノロジー	身体状況に合わせる用具やルール	身体機能の拡大を伴わず身体状況に用具やルールを対応させる競技
障害者	車いす, 義足	無	ボールの大きさ, コートの広さ, 試合時間, ネットの高さ	ブラインドサッカー, サウンドテーブルテニス
健常者	眼鏡, 高速水着, 高速タイヤ, スパイク	車いす, アイマスク	ボールの大きさ, コートの広さ, 試合時間, ネットの高さ	ラージボール卓球, ミニバスケットボール

### 3. 障害者スポーツ体験がもたらす障害へのポジティブな応答の3つの解釈

#### 3.1 健常者と障害者の身体機能の逆転

障害者スポーツ体験では、健常者の身体機能を縮小させている。ことによって、健常者の身体機能が障害者の身体機能とほぼ同等、あるいは、障害者スポーツ体験初期においては、拡大した障害者の身体機能が縮小した健常者の身体機能を上回っているという状況が作り出されていると考えられる。したがって、健常者である自分ができないことが障害者にはできる（たとえば、車いすバスケットボールのシュートで、健常者である自分はゴールに届かないけれども、障害者のプレイヤーは届く場合など）ことによって、障害に対して「できない」という否定的な要素が消し去られ、ポジティブな応答につながっているのではないだろうか。ここに、「障害

があるのにすごい」というポジティブな感想が出現する。健常者の身体機能の縮小と障害者の身体機能の拡大とのバランスによって、障害へのポジティブな応答がコントロールされるとも言えよう。したがって、ポジティブな応答は、障害者の身体機能の拡大による身体機能が健常者の身体機能の縮小による身体機能よりも下回った場合には、成立しない可能性があるということでもある。

### 3.2 「できない」を楽しむスポーツの非日常の経験

このように、健常者にとっての障害者スポーツ体験は、身体機能を縮小させる経験を伴う経験である。このことは、日常生活において、より合理的、効率的に身体機能を拡大させていくことと逆行する。ここに、スポーツの根源である遊びが現れる。遊びの特徴について、文化人類学者の西村は、ヨハン・ホイジンガの『ホモ・ルーデンス』における遊びの定義を引用しながら、以下のように述べている。

遊びは、真剣な日常生活の現実性からすれば、その埒外にあって、これとは無縁な、無意味で無用で、無秩序な現象である。それは、本気ではない、それゆえ、一種のフィクションであり、仮象の見かけである。それが、剰余として、あるいは、幼児期というモラトリアムとして、さらには、余暇や気晴らしとして、真剣な生存の強制からまぬがれているかぎりでは、それは、なるほど、自由である。遊んでいるという意識は、それが日常生活とはちがうという意識、つまり、非日常、非現実な仮象の意識である。

(西村, 1989: 15)

健常者にとっての障害者スポーツ体験の場では、本来は足で歩いたり目で見たりできるにも関わらず、それらの機能を縮小し、車いすに乗って移動したり、人の声や音の大きさ、手で触った感触等を頼りにボールの位置や人の動きを予想して動いたりする。そして、車いす同士でぶつからないように自分の車いすのスピードをコントロールしたり、聞こえてくる音の方向や大きさからボールと自分との距離を調節したりする。障害者スポーツ体験は、「できない」を楽しむスポーツの非日常の経験としての遊びであるからこそ没頭し、それゆえ楽しさを生み、結果として障害へのポジティブな応答につながっているのではないだろうか。

### 3.3 他者性を内包する「開かれた身体」の獲得

佐藤（佐藤, 1999）は、松田（松田, 1997）が述べている〈身体〉がまさに他者と出会う場所であり自身の「身体」にこそ常に他者と自己を抱えているという主張や、岡崎（岡崎, 1995）の理性あるいは認識にしたがって分析、分断された非連続的存在としての個々人が、溶解体験に見られる外界への全体的な参加や没入を通じて異質な深い主観同士が交流し合う「交流の共

同体」などを取り上げ、プレイによる自—他の境界の融解の可能性を考察している。また、松田（松田，2010）は、身体が自己目的的に操作されるとき、そこでの身体は日常的生活を送る自己の身体に対して「他者性」を帯びたものとなると述べ、経験の外部で接続してくれる「他者性」が遊びの中で自前で構成することができることを指摘している。さらに、河西（河西，2010）は、バタイユの「開かれた身体」＝「エクスターズ」する身体＝私の身体が私の身体であって私の身体でなくなるとき、すなわち、主体によって閉じられ自己完結した身体ではなく他者に開かれた身体が、他者肯定につながる可能性を示している稲垣（2005）の主張を基に、健常者と障害者が共に車いすバスケットボールを行う場面に身体性の議論を持ち込んだ分析を試みようとしている。これらの主張はいずれも、「閉じた（閉じられた）身体」、すなわち、自己の理性や認識によって制御された範囲内で日常生活を営んでいる身体が「溶解する」する過程、すなわち、自己の理性や認識による枠組みそのものが緩んだり無効化したりする過程を経ることで、これまでの理性や認識の枠組みの中で完結していた自己では入り込む余地の無かった身体に他者の身体性が入り込む、すなわち、他者性を帯びた「開かれた身体」が獲得される可能性を示している。そして、その契機となりうるのが、没入経験を伴う遊びの存在である。これらのことから、遊びとしての障害者スポーツ体験によって、健常者の身体に他者性を内包する「開かれた身体」の獲得がなされた場合、障害へのポジティブな応答につながっているのではないだろうか。

#### 3.4. 「健常者と障害者の身体機能の逆転」「『できない』を楽しむスポーツの非日常の経験」「他者性を内包する『開かれた身体』の獲得」の関係性

ここまで、健常者の身体障害者のスポーツ体験においてなぜ障害へのポジティブな応答が見られるのか、その理由について3つの観点からその可能性を考察してきた。3つの観点とはすなわち、①身体機能の拡大や縮小による「健常者と障害者の身体機能の逆転」の観点、②スポーツの文化的特徴である非日常である遊びを基軸にした「『できない』を楽しむスポーツの非日常の経験」の観点、③身体に着目した「他者性を内包する『開かれた身体』の獲得」の観点である。これらの3つの観点は、それぞれ独立して存在しているわけではない。なぜなら、①で健常者が前向きに身体機能を縮小させることと、③で健常者の身体が他者（障害者）に開かれることとは、共に日常の社会生活のあり方が崩される中で生起されるものであり、それを可能にしているものとして、②の障害者スポーツが非日常としての遊びの性質を包含していることがあることだからである。

健常者による障害者スポーツ体験は、健常者である自分ができないことが障害者にはできる（たとえば、車いすバスケットボールのシュートで、健常者である自分はゴールに届かないけれども、障害者のプレイヤーは届く場合など）ことによって、障害に対して「できない」という否定的な要素が消し去られ、「障害があるのにすごい」というポジティブな応答への変容が見ら

れる。ここには、健常者と障害者との間で遊びという非日常を媒介することで、日常生活の延長として障害を理解しなければならないといったまじめで常識的な構えが崩されたがゆえに身体が他者（障害者）に対して開かれ、そして、ポジティブな応答が可能になったと考えることもできるであろう。したがって、推論の域ではあるが、下半身が使えない障害のある車いすバスケットボールのプレイヤーが、下半身が使えないのにゴールまでボールを投げることができるということに対する健常者の「障害があるのにすごい」という言葉には、下半身を使えない不自由さへ注目ではなく、下半身を使わないでボールを投げることに対する賞賛の言葉と考えることができるのではないだろうか。このように捉えると、「障害があるのにすごい」という感想と「差異が溶解して無くなってしまう経験」とは一見矛盾しているように見えて、矛盾したものではないと言えよう。

## まとめ

健常者の障害者スポーツ体験において、ポジティブな応答の報告がみられることの理由について、健常者の身体に着目して検討した。その結果、3つの仮説が導き出された。すなわち、健常者の障害者スポーツ体験では、健常者と障害者の身体機能の逆転が起きることによって、障害に対する「できない」という否定的な要素が消し去られること、健常者にとっての障害者スポーツ体験が「できない」を楽しむスポーツの非日常としての遊びの体験となり、だからこそ没頭しそれゆえ楽しさを生んでいること、非日常としての遊びである障害者スポーツ体験によって健常者の身体に他者性を内包する「開かれた身体」の獲得が促され、そこに自-他の境界の溶解の可能性があること、である。裏返せば、健常者による遊びではないまじめな障害の疑似体験においては、自-他の境界の溶解体験を伴わないことから、健常者の身体は「閉じた（閉じられた）身体」のままである。したがって、遊びではないまじめな障害の疑似体験による身体機能の縮小は、自己の理性や認識による制御に基づく日常生活の延長に留まることから自ずと、困りこと、むずかしいこと、できないこととして認識され、障害へのネガティブな応答に結びつきやすいと言えるのではないだろうか。

これまでの健常者の障害者スポーツ体験に関する研究の観点は、身体障害者のスポーツ体験に限定的である。その上で、障害理解に対する有効性は検証しているが、なぜ障害に対するポジティブな応答が得られているのかについて、考察されているものが非常に少ない。今後の健常者の障害者スポーツ体験に関する研究については、疑似体験の難しい知的障害者や精神障害者も含めて検討することもできるように、なぜ障害に対するポジティブな応答が得られているのかについて、特に身体の見方から考察していくことが必要なのではないか。また、本稿は、健常者の障害者スポーツ体験による障害に関するポジティブな応答がみられることの理由について、理論的なアプローチから仮説を示したに過ぎない。したがって、データ収集と分析とによっ



てその有効性を検証することが必要である。このこともまた、今後の課題である。

### 【注】

- 1) 車いすバスケットボール体験会は、2000年8月と2001年8月に、T県内の福祉を学ぶ短期大学1年生で車いすバスケットボールを行ったことが無い学生それぞれ10名を対象として、各90分間実施した。男女の人数については、2000年が男子4名、女子6名、2001年が男子5名、女子5名である。なお、どちらの年も障害を有する学生は含まれていない。体験会では、車いすバスケットボールを行うにあたって必要な車いす操作の練習、ボールの拾い方、パス・シュートの練習、ゲームの順に行った。シュート練習では、2年間共に主に女子学生において、ゴールにボールが届かない様子が見られた。また、男子学生でも、ゴール下で車いすを停止させた状態からのシュートでは、ゴールに届かない学生もいた。床にあるボールを車輪の回転に合わせて拾う練習では、上半身を横に傾けて片手でボールを車輪に押し当てる際、男女共にボールを触っている位置が上過ぎて車輪へのボールの押しあてが弱かったり、転がるボールのスピードに車いすをこぐスピードが追い付かず、上手く拾えなかったりした様子が見てとれた。練習中や体験会終了後に、筆者から上手く行っていない学生に対して、なぜ上手くいかないのか（上手くいかなかったと思うのか）について、ヒアリングを行った。

### 【参考・引用文献】

- 古岡尚美・内田匡輔, 2007, 障害のある人と「障害者スポーツ」に対する体育学部生の認識の変化に関する調査「障害者スポーツ演習」の試みと効果, 東海大学紀要体育学部 37: 21-27.
- 加地信幸・河野喬, 2016, 電動車椅子常用児童を対象としたインクルーシブ体育実践に関する研究, 社会情報学研究 21: 51-61.
- 河西正博, 2010, 障害者スポーツにみる「健常者」/「障がい者」間の関係構築と身体性, 松田恵示・松尾哲矢ほか編『福祉社会のアミューズメントとスポーツ』, 世界思想社, pp.202-218.
- 久野研二, 2001, 障害と態度: 尺度と啓発—最近の傾向, リハビリテーション研究 109: 32-36.
- 国永英代・曾根裕二ほか, 2014, 障がい者スポーツの体験は子どもたちの障がい理解を促進するか, リハビリテーションスポーツ 33 (1): 20.
- 稲垣正浩, 2005, <スポーツする身体>を考える, 叢文社.
- 松原崇・佐藤貴宣, 2011, 障害者疑似体験の再構成, ボランティア学研究 11: 85-98.
- マーシャル・マクルーハン, 栗原裕・河本仲聖 (翻訳), 1987, 『メディア論—人間の拡張の諸相』, みすず書房.
- 松田恵示, 1997, 身体とプレイ・スポーツ, 松田恵示・松田雅彦ほか編『スポーツ文化と教育』, 学術図書出版, pp.47-59.
- 松田恵示, 2010, 松田恵示・松尾哲矢ほか編『福祉社会のアミューズメントとスポーツ』, 世界思想社, pp.6-8.
- 日本障がい者スポーツ協会編, 2018, 『新版障がい者スポーツ指導教本』, ぎょうせい, pp. 221-227.
- 西館有紗・水野智美ほか, 2016, 地域で実施されている福祉体験講座の問題点と改善策の提案—視覚障害歩行体験と車いす体験に焦点をあてて—, 障害理解研究 (17) 1-16.
- 西村清和, 1989, 『遊びの現象学』, 勁草書房.
- 岡崎宏樹, 1995, 交流の共同体と合一の共同体 —バタイユとジラルの供儀論の比較から—, ソシオロジ 39 (3) 3-21.
- 齋藤まゆみ, 2015, 「ノーマライゼーション思想と障がいのある人のスポーツ」, 中村敏雄・高橋建夫ほか編集主幹『21世紀スポーツ大事典』, 大修館書店, p.976.
- 佐藤充宏, 1999, 障害者スポーツを共有する身体の風景, 徳島大学総合科学部人間科学研究 7: 67-78.

- 高橋真琴・鈴木伸尚, 2016, 情報コミュニケーションとしての歩行を再考する ―「介助としての手引き」時の相互交渉を通して―, 鳴門教育大学情報教育ジャーナル 13 : 1-8.
- 安井友康, 2004, 車いすバスケットボールの交流体験が障害のイメージに与える影響, 障害者スポーツ科学 2 (1) : 25-30.

#### 【インターネット資料】

- 朝日新聞デジタル版, 「陸上競技の義足, ランナーに強い筋力と高度な技術必要」, 2016年5月3日, <https://www.asahi.com/articles/ASJ516HC3J51UTTO005.html>, 最終閲覧日: 2019年9月19日.
- 富山県障がい者スポーツ指導者協議会, 「平成29年度 障がい者スポーツ指導員中級受講報告」, [http://toy-paraspo.com/2018/03/29/障がい者スポーツ指導員 %E3%80%80中級 %E3%80%80受講報告 /](http://toy-paraspo.com/2018/03/29/障がい者スポーツ指導員%E3%80%80中級%E3%80%80受講報告/), 最終閲覧日: 2019年9月19日.

## A discussion on the experience of disability sports by the able-bodied:

Why is a positive response to disability generated?

Mutsuko OKUDA

### Abstract

This study explores the possible reasons for positive responses being generated when able-bodied persons experience disability sports. This study focuses on the bodies of the able-bodied and has established three hypotheses. The first hypothesis is that when able-bodied persons experience disability sports, the negative element of “unable to do” in disability is wiped out because of the reversal of body functions between the able-bodied and the disabled. The second hypothesis is that the able-bodied persons’ experience of disability sports turns into an experience of play, as something extraordinary, wherein they enjoy being “unable to do” a task. Finally, when the able-bodied persons acquire an “open body,” which can include the other through their experience of disability sports; there is a possibility of merging boundaries between the self and the other.

As for future research around the topic of the able-bodied persons’ experience of disability sports, the necessity is to develop the capacity to examine the cases of the intellectually disabled and those with mental illnesses, whose experiences are difficult to replicate by investigating why positive responses to disability are generated, focusing on the perspective of the body.

**Keywords:** able-bodied persons, experience of sports for people with disabilities, the body, play, disability

